

## 生命は個体的か？ —カントから現代の生命論へ—

稲 垣 恵 一

### 1. はじめに

人間を万物の中のどこへ位置づけるのかという問題は、古代哲学から引き継がれている伝統的な問題である。例えば、プラトンが『ティマイオス』で知的存在によって動かされる宇宙について「もっともありそうな言論」として論じたのは、その問題のひとつであると言えるだろう。また、アリストテレスが、『魂について』で人間を最高位に秩序づけたり、あるいは、中世のトマス＝アキナスが神を頂点にして人間を万物の中に秩序づけているのもそうした問題に含まれよう。

こうした問題への関心はカントにも流れ込んでいる。万物の秩序づけにおいては「一（統一）」、「真」、「善」が問題とされるのに、たしかにカントは『純粹理性批判』ではスコラ学者の命題を挙げて、「実在するものは一と真と善である……この原理を使用して導かれた推論（これは完全に循環命題を与えるにすぎない）は、あまりに貧困な結果に陥っているので、名誉のためだけに現代の形而上学でもその命題を挙げるのが常であるのだ」（B114）と述べ、「一」、「真」、「善」を実在へ適用されるカテゴリーとして認定しない。しかし、これらへの関心まで捨ててはいない。

カントが一定の数のカテゴリーだけを現象に適用可能なものとして認めたのは、カテゴリーが超越的に使用されて認識の客観性が損なわれないようにするためであった。実践哲学でもやはりカテゴリーに従って欲求能力の制約、範囲、限界が検討され、経験の領域の外に実践哲学の領域が確保された。『判断力批判』は、まさしく『純粹理性批判』と『実践理性批判』の架け橋であって、「自然概念の領域から自由概念の領域への移行を可能にする」判断力の批判である。こうして、それぞれの批判は、認識能力の批判として、「真」（理論理性）、「善」（実践理性）、「一」（両者をつなぐ判断力）をしかるべき領域へと位置づけ、実在もまたその領域に秩序づけられているのである。『判断力批判』は、合目的性の原理だけを使用して実在を体系的に統一しようとする物活論、および、数学的力学的原理だけに従って実在を体系的に統一しようとするスピノザ主義の両者を否定し、合目的性の原理の適用範囲を限界づけている。このこともまた、『判断力批判』には、批判の原理に従い認識能力に対応して実在を秩序づけようという意図があるということを示している。カテゴリーと対象（存在）が明確に分離され、しかも、神や物自体と現象も明確に分離されているということから、そうした戦略が導かれるのは必然的である。

『判断力批判』に依れば、「人間は、諸目的を理解し、合目的に形成された事物の集合体

から理性によって諸目的の体系を作りうる唯一の地上の存在者だから」(V, S. 426, 427)、人間は万物の頂点に位置づけられる。ここでの諸目的は、道徳的な最高目的と結びつけられていく。まさしく道徳的な最高目的を取り扱う『実践理性批判』では、善(純粹)意志は欲求能力のひとつであり、道徳法則によって自律的に決定されるものである。カントに依れば、欲求能力とは「思い浮かべたものを実現する原因となる表象による能力」(V, S. 9.)であり、また、『道徳形而上学』でも、欲求能力が様々な区別され、中でも意志は動物的な選択意志と純粹理性によって決定される選択意志とに分けられている(Vgl. VI, S. 212ff)。さらに、『実践理性批判』ではこうした欲求能力は、「生命」として定義づけられているのである(Vgl. V, S. 9.)。ここから人間と動物の区別は、理性を持つか、持たないかに依ることになる。ところが、フィロネンコは、「生命そのものは、最も高い段階つまり人間にあるとされうる」<sup>1</sup>と述べ、「生命」を人間にのみ認めるのである。さらに、フィロネンコは、「生命」の本質は「個性性」にあるとする<sup>2</sup>。フィロネンコが言うところの「生命」は、動物から区別された人間にのみ認められるものであるから、自由な選択意志つまり実践理性と言い換えてもいいだろう。理性に「個性性」を認めるのは、フィロネンコが初めてではない。例えば、トマス＝アキナスもまたそのように考えていたのである<sup>3</sup>。

しかし、カントの実践理性は各人に内在するものであるとしても、誰の理性であれ道徳法則によって意志決定されるような理性なのだから、自己の理性と他者の理性を区別するものは何もない。とすれば、フィロネンコの言うように、そのような理性を含む欲求能力として定義される「生命」にそもそも「個性性」を認めることはできないのではないか。また、もしもそうだとすれば「個性性」はどこに求められるべきか。これに答えることが、本稿の目的である。

## 2. 実在の秩序

カントは、単なる物体、有機体、動物、人間をどのように区別していたのか。これを、『判断力批判』を中心に見ていきたい。また、『判断力批判』だけでは不十分な点については、その他の著作も援用していきたい。

カントは、『判断力批判』「目的論的判断力の批判」で存在するものを合目的性の原理に従って区別秩序づけていく。カントに依れば、合目的性の概念は「自然にかんする判断力のために必要な概念であるが、客観そのものの規定にはかかわらない概念」(V, S. 270)であり、合目的性の原理は「われわれの理性にとっては統制的なものとして、あたかも客観の原理であるかのように必然的に認められる」(V, S. 270)ものである。なぜなら、この原理がもしも客観的原理と見なされるなら、即座に『純粹理性批判』「先験的弁証論」で論じられたような仮象が生ずるからであり、その仮象はすでにそこで取り除かれたからである。従って、合目的性の原理を使用して実在を区別するということは、判断力を持つ者たちの見方にもとづいて自然を判定するということに直結する。その意味で、合目的的判断は、判断力を持つ者の間でされる相互主観的判断である。

最初に区別されるのは、合目的性の原理に従うものと機構の原理に従うものである。こ

れは、有機体とたんなる物体つまり物理的物体を区別するということを意味しよう。有機体とたんなる物体の区別は、常識的には生命体と非生命体の区別と考えられそうだが、フィロネンコも言うとおり、カントにおいては有機体が必ずしも「生命」と呼ばれるとは限らない<sup>1</sup>。その理由は、『判断力批判』第64節でカントは、樹木の事例を挙げて有機体を説明し、有機体を生命を持つものの下位にあるものとして位置づけているからである。カントに依れば、樹木は

①自然法則に従って自分と同じ類の木を生み出す（樅の木は樅の木を生み出す）。

②1本の木は木の諸部分（根、茎、葉等々）を生み出す。

③木全体と木の諸部分は相互依存的関係にある。

(Vgl. V, S. 371ff.)

しかし、カントはこうした特徴について「[自然目的としての]物体の諸部分は全て、その形式と結合に従って相互に産出し合い、そして、全体を自分自身の因果性にもとづいて産出する」(V, S. 373.)と言う。つまり、全体は部分のために、部分は全体のためにというわけである。しかし、このことは有機体を特徴づけるのに不十分である。なぜなら、時計のような機械の部品は「技術の道具」(Ebd.)と見なされるが、時計のような道具もまた全体は部分のために、部分は全体のためにあるからである。そこでカントは、有機体と時計の違いを挙げて、合目的性の原理に従うものとそうでないものの区別をさらに明確にする。

『判断力批判』第65節に依れば、時計の特徴は次の点にある。

1) ある部分は別の部分を動かす道具である、

2) 時計は自分と同じ時計を自己産出ししない、

3) 時計は、故障しても自分を修理できない。

(Vgl. V, S. 374.)

1) では、諸部分は運動全体の原因ではあるけれども、歯車Aは歯車Bを産出ししない。それに対して、有機体の場合、枝から葉が生えてくるようにまさしく部分が部分を生み出す。2) では、同一規格の別の時計を生み出すためには、人間の手を必要とする。それに対して、有機体は生殖活動を通じて同一種の別の個体を生み出す。3) では2)と同じく時計の修繕には職人の手を必要とするだろう。それに対して、有機体は欠損部分を自ら生み出そうとする。敢えて言えば、自然治癒力を持つとも言えよう。

もっとも重要なのは、フィロネンコも指摘するとおり、有機体では①、②、③が別々の契機としてあるのではなく、それぞれが分かちがたく結びついている点である。つまり、有機体は「統一」を持つ。ところが、時計には、③の契機のみが認められ、①、②は完全に欠落している。さらに、時計の部分と全体の相互依存的な関係に統一つまり目的を与え

ているものは、時を知らせるためという目的を時計に付与した人間の心の中にある。とすれば、もはや時計自体には統一は含まれていないということになる。こうしたことから、時計はいわば、自らの外から合目的性を付与されていても、時計自身が持つ力は「動かす力」(V, S. 374.) にすぎないのに対して、有機体は「形成力」(Ebd.) を持つということになる。この点で両者は区別されているのである。

カントは、こうした有機体のあり方を「生命の類比物」(V, S. 374. ff) と呼べば、有機体の特性をより適切に表現していると言う。カントにとって生命とは、きわめて実践的なものである。『実践理性批判』に依れば、生命とは「欲求能力の法則に従って行為するある存在者の持つ能力」(V, S. 9.) であり、欲求能力とは「思い浮かべたものを実現する原因となる表象による能力」(Ebd.) である。樹木のような有機体はたしかに上であげた①、②、③によって自ら物質を取り入れ、たんなる物質から区別されたものとして自らを有機化する。しかも、自己保存のために環境に応じて自らを有機化するのである。時計は、酷暑に対応しきれず故障してしまうことがあるように、環境の変化に自ら応じることができない。しかし、樹木には熱帯で育つ樹木があるように、自らを暑さに対応できるように変化させることで種の維持を図ってきたのである。その限りにおいて樹木はたしかに自らが生存するための目的へ向かう能力を持つ。しかし、木は自ら目的を識別や意識したりして自己を有機化するのではない。それ故、樹木は「生命の類比物」と言われるのである。その場合にもカントは、樹木に代表される有機体を物活論で言われているような物の一例であるのも否定しているし、船と船頭の関係で物体と魂を捉えるというタイプの二元論をも拒否している。

それでは、目的の表象を持つとされる動物は生命なのであろうか、それとも生命の類比物なのだろうか。カントは、『道徳形而上学』のなかで「理性を欠くが生命を持つ被造物にかんして、動物を暴力的にまた同時に残虐に扱うのは、よりいっそう心から、人間の自己自身による義務に反している」(VI, S. 443.) と言っており、動物が生命を持つということを確認している。『道徳形而上学』に依れば、「原因として快が必然的に先行して欲求能力を決定するもの」が「欲望」と呼ばれ、それが習慣化したものが「傾向性」と言われている。傾向性つまり「動物的衝動」によってだけ決定可能な選択意志は、動物的な選択意志である (VI, S. 212ff)。動物的な選択意志は意欲のひとつであるから、動物に生命は認められるのである。

最後に、人間と動物の区別は何に根拠づけられるのだろうか。『道徳形而上学』の冒頭では、「人間の選択意志は衝動によってたしかに触発されるが、しかし決定されはしないのであって……純粋な意志にもとづく行為へと決定されることが可能なのである」(VI, S. 213.) と言われている。動物とは異なり人間は純粋な意志にもとづく行為へと決定されることが可能である、すなわち衝動に抗して道徳的にも振舞いうる。それだけでなく、認識能力の面でも動物と人間は区別されうる。『論理学』の中でカントは、「[認識の] 第四の段階とは、意識を伴ってあるものを識別すること、つまり、認識することである。動物も対象を識別するが、対象を認識するわけではない」(IX, S. 65.) と述べている。識別する

とは、一様性と差異性に従ってものを区別するということであり、第三の認識の段階に相当する。第四の認識のポイントは、「意識を伴って」というところにある。動物は、ものを区別できたとしても区別を意識しているわけではない。それに対して、人間はその区別を意識している。また、『教育学』「序説」で「人間は教育されなければならない唯一の動物である」(IX, S. 441.)、「動物は、自らの様々な能力のうちどれであろうとも、それを身につけるようになりさえすれば、すぐにその能力を規則に従って使用する」(Ebd.)、「動物は養育を必要とせず…〔中略〕…一種の保護を必要とするだけである」(Ebd.)とされているが、それは、動物は意識せずともつまり本能的に事物を区別して、その識別能力を使って生存しているということを意味する。フィロネンコも指摘するとおり、動物は、「考えることができないので、決して目的をそれ自体把握する動物としては特徴づけられない」<sup>5</sup>のである。

従って、理論においても実践においても意識の有無が動物と人間の違いを決定づけているということになる。

### 3. 個体と生命

機械、有機体、動物、人間は、以上のように区別され、実在の区別はこれで一件落着いているように見える。ところが、フィロネンコはこの区別の根幹にある「生命」の概念について、ふたたび「生命とは何か」と問うのである。フィロネンコは「生命の実在性は、生命の定義の彼岸にある」<sup>6</sup>と言う。フィロネンコは、『世界公民的見地における一般的自然史の理念』にある「人間は本能を離れ、自分の理性によって生み出したもの以外のいかなる幸福や完全性にもかかわらない」という文言を強調する。有機体や動物は、その活動や本能によって区別された。それに対して、人間は、理性の活動ゆえにそれらから区別されたのである。理性の活動は、有機体や動物の活動や本能のように実在するものによって特徴づけられない。まさしく、理性の活動は無へと志向しているのである。例えば、理性にもとづく道徳的行為は、未だないものを行為によって実現するのであり、理性はないものの、つまり、無を志向するのである。カントにとって道徳的行為はかつて得たことのある快をふたたび得るためになされるのではなく、それ自体善いからなされるべきなのであり、その意味でも理性は無を志向する。それ故フィロネンコは、「欲求能力の法則に従って行為するある存在者の持つ能力」という生命の定義によっては生命の実在性は語りつくせない、と言うのである。

フィロネンコが生命の本質と見なすのは、欲求能力ではなく「個性性」(Ebd.)である。なぜ個性性が生命の本質となるかと言えば、「個性性」は、他を必要としないでそれだけで存立するからである。つまり、有機体や動物は、有機体と動物との関係において、それぞれ区別された。それに対して人間は自分の理性によって生み出したものによってのみ自らを特徴づけるのであるから、ここに理性以外のものが入る余地はない。それゆえに「個性性」が理性において、ひいては人間において存立していると言うわけである。

フィロネンコは、生命の本質を「個性性」と見なす論拠として、『判断力批判』第64節の

植物についての議論を挙げる。この議論に依れば、樹木のような有機体には接木できるという特徴がある。例えば、1本の桜の木に桃の木の枝が接木されている場合、桜の木は、同じ類として成長し、自らを生み出しているとは言えない。なぜなら、桜の枝の一部から桃の木も生長しているからである。別の見方をすれば、接木が可能であるということは、同一種の枝や葉もまた接木されたものと見なすことが可能となるということを意味する。例えば、桜の木Aの枝を、桜の木Bに接木したとする。Bには、もともと生えていなかったAの枝がくっついているわけで、B自体が他の個体Aとの複合体ということになる。また、Aの枝は、どの部分も挿し木をしてやれば、分身が育つわけである。この分身はAなのか、それともA'なのか?……そのように考えていくと、1本の木の個性性を決定することはできない。それ故、フィロネンコは、植物に見られる有機体については「カントの立場からは有機体と個体は交換概念ではない」<sup>7</sup>し、「木は木の真なる共和国」<sup>8</sup>を形成するだけであると言うのである。それに対して、動物の場合、例えば、一匹の猿の肝機能が停止したので、犬の肝臓を移植するといったことは不可能である。また、同一種の別の猿の肝臓を生体移植したとしても拒絶反応が生じ、枝を接木するようにはうまくいかないのである。また、肝臓のクローンも相当に医療技術を駆使しない限り、挿し木のようにうまくいかない<sup>9</sup>。それ故、動物は個性性を持つ。まさしく、単なる有機体と動物の相違は、同一種のもつ個性性を維持しているかどうかという点に求められるだろう。しかも、動物は欲求能力つまり生命を持つのであるから、ここで生命と個性性が結びつくのである。

さらに、フィロネンコは生命の本質である「個性性」を、「情感的判断力の批判」第40節で論じられている「共通感覚」論、および、第55～57節で論じられている趣味の二律背反論の中に見ようとする。共通感覚は、「自分の反省において、他の人たちがそれぞれに持つ表象の仕方を思想において（ア・プリオリに）顧慮する判定能力、いわば、人間理性全体と自分の判断を照らし合わせるための判定能力」（V, S. 293ff.）であり、この能力の格率は「判断力の格率」（V, S. 295.）と言われている。カントに依れば、趣味は共通感覚であり、「（概念を介さずに）与えられた表象と結びついた感情の伝達可能性をア・プリオリに判定する能力」（V, S. 296.）である。つまり、個々人で異なっている快の感覚を、複数の他者と共有できる、すなわち共感できるということが趣味の本質なのである。共通感覚によって自己と他者の区別が可能になるわけである。

フィロネンコの解釈には3つの問題がある。第一に、フィロネンコは「理性」が個体的であって自ら個性性を理解しているとした上で、さらにこの個性性は「判断力」によって判定されると考える。つまり、生命に理性が内在しその理性が個体的であるからこそ、生命もまた個体化されるというわけである。ここに生命の本質が個性性であるということが成立するのだが、これに従う限り、理性によって個性性を受け取る人間こそがゆいいつ個体的な存在ということになる。つまり、人間だけが生命を持つということになるのである。となれば、理性を持たない動物が生命を持つことはできなくなってしまう。そのせいで、動物も植物と同じく「生命の類比物」に判定されざるをえなくなり、カントのテキストに矛盾する。また、先の『道徳形而上学』の動物虐待の禁止についての引用（Vgl.

VI, S. 443.) の解釈もまた困難になってしまう。個性が理性から供給されるのだとすれば、それは生命の本質ではなく、むしろ理性の本質である。ここからも、個性は生命の本質とはならないのである。

第二に、判断力はたしかに複数の個体を承認する。しかし、それは他者を承認すると同時に自己をも承認されるということを意味するのである。このことは、理性が孤独であるということの意味しないのである。共通感覚論で言われている判断力の第二の格率は、第三の格率つまり自己一致して考えることの前段階の格率である。もしも第二の格率が「孤独な理性」という意味での「個性」を理解させるとしたら、それは、『判断力批判』「序文」にある理性と判断力の認識の区分<sup>10</sup>を不分明にすることになる。また、『純粹理性批判』「先験的弁証論」付録で、カントは、同種性、多種性、類同性の3つの原則の使用を理性の仮説的使用としてあげ、経験を多様に見る方向と多様な経験をひとつの原理のもとに統一する方向の両方から経験的世界について論じている。これが可能とされるのは、まさしく理性が可能的経験の外にあるからである。従って、理性が、ある経験的なものが「孤独」か「コミュニケーション的」かという文をも理解可能にしている。ところが、「コミュニケーション的」が対置されないようなコンテキストでは、そもそも「孤独」という語は意味を持たない。ヘッフェは、理性自身は、「モノローグ的」つまり「孤独」か、あるいは、「コミュニケーション的」かという選択肢のあるパラダイムから排除されている<sup>11</sup>が、それは正しい。従って、フィロネンコのように、理性の個性（ヘッフェであれば「孤独」）をそのまま生命にシフトさせることはできないし、また、それはカントの方法にも反する。なぜなら、カントは『判断力批判』を「情感的判断力の批判」と「目的論的判断力の批判」の二部に分け、前者を特殊な能力としての判断力の批判、後者を反省的判断力一般としての批判としており、情感的判断力は反省的判断力のうちの特殊な働きを持つ判断力にすぎないからである。従って、情感的判断力によって判定される特殊な（つまり、人間にのみ認められる）個性を、本来、目的論的判断力で判定される（動物にも一般的に認められる）個性と重ねあわせにすることはできないのである。フィロネンコは、理性の個性（孤独）と情感的判断力で判定される個性を同一視した上で、さらに、情感的判断力と目的論的判断力の対象領域をも混同してしまっており、二重の誤りを犯している。

第三に「生命」の本質が「個性」にあるとフィロネンコが言うようなことを、カントはどこでも言うてはいないのである。そもそもカントに依れば、「生命」は欲求能力によって定義されている。欲求能力には純粹意志と動物的な意志があり、この両者を持つのが人間であり、後者のみを持つのが動物である。純粹意志は、自己立法して意志を決定する。ただしこの理性は各人に内在しても、各人の理性の性格は同一である。とすれば、純粹意志そのものに「個性」を求めることはできない。それでは、動物的な意志に個性を求められるかと言えば、それも無理であろう。なぜなら、動物的な意志は衝動によって決定されるものであるから、どの動物においてもその意志だけをとってみれば、同一の法則に従って働くからである。それは生殖について言えるだろう。カントは種の繁栄について

「こうした一対（両性）は、ひとつの物体における有機的全体でないとしても、何よりもまずひとつの有機化する全体を作る」（V, S. 425.）と述べており、動物の個体は性という特徴を備えた個体であって、それらは同一の法則に従って生殖活動を行う。動物的個体は、種を保存しようとする動物的意志一般の手先にすぎない。従って、理性にも個性はないし、動物的意志そのものにも個性はないということになり、フィロネンコが言うような「個性」、「他者性」は、直接には「生命」と結びつかないのである。とすれば、生命の外から、理性や動物的意志を個体化して判定するものを、つまり、判断力を持ち出すよりほか方法はあるまい。

#### 4. むすび

カントにとって「個性」は、2つのレベルで考えられなければならない。ひとつは、情感的判断力の批判にある共通感覚の格率で示されている自他を区別するような「個性」、もうひとつは目的論的判断力の批判にある、一般的自然史のレベルでの「生物的個体」である。前者は、文化的、社会的、情感的な「個性」、「他者性」であり、後者は生物学的な「個性」である。これらは判断力によって「個性」として判定される。従って、他を廃し自己を維持するものであれば、「個性」を持つわけである。このようなものとして対象を分類するのは、判断力の働きである。従って、個性は理性から供給されるものではない。有機体の中にも接木や挿し木の不可能な種があるということも考慮すれば、個性は生命の本質でもないという主張をさらに正当化するだろう。個性は、判断力によって付与されるのである。また、判断力には帰納能力があり、個体を高次の類種へと纏め上げていくこともできる。生殖の場面では、生命は個体を種の維持へと解消していくということを考えれば、必ずしも生命を個体的なものであると考えることはできない。そればかりか、何世代もの個体を貫いているのが生命でもある。従って、判断力によっても、生命は個性としてのみ判定されるわけではなく、類種の観点からも判定されるのである。

ところで、動物は生物的個体でしかなく、その個体は種の維持や生殖に解消されていく。それに対して、人間だけが種の維持や生殖に解消されていくことのない面も持つ個体的な存在者である。そのことは、『判断力批判』で雄弁に語られている。それは「情感的判断力の批判」でも「目的論的判断力の批判」でも語られている「開化（Kultur）」において表されている。とりわけ、「目的論的判断力の批判」では、「有能さ」や「熟練」が究極目的とされ、「開化」は、「究極目的であるために人間自身がしなければならないことに対して人間を準備するために自然が果たしうること」（V, S. 431.）であり、熟練の産物として生ずるとされている。開化の中でも美術や諸学のように、「普遍的に伝達されうる快によって、また社会の彫琢と洗練によって、人間を教養あるものにする」ものもあり、「われわれのうちに隠されているさらに高次の諸目的に対する有能性を感知させる」（V, S. 434）と言われている。ここで重要なのは、「有能性」が「美術」と関連づけられており、しかも、これに「普遍的な伝達可能性」が付与されている点である。このことは、「情感的判断力の批判」で言われた共通感覚論で論じられたものである。また、美は「道徳性のシンボル

であって、これを顧慮して（各人にとって自然的であり、どのひともし他の人々に対して義務として要求する関係において）のみ、他の人々それぞれに賛同の要求を伴って満足を与える」（V, S. 353）と言われている。従って、熟練の開化のひとつとして美術があげられているということは、美は、道徳的存在者でもある人間を感知させながら、また、道徳的存在者でもある他者を各人に承認させるということを表していることになる。ここでの他者が、自然の中で生き抜く生物的な個体でありながらも、文化的、社会的、情感的な個体であるのは論を俟つまい。つまり、人間は、生命というタームで特徴づけられるのである。カントにとって生命は、感覚的な欲求のみならず、道徳的な欲求をも包括するものである。生命は、一方では、生物的個体、類種を維持し、他方では文化的個体や社会、道徳の形成に寄与する。従って、生命の本質は個性性ではあるまい。生命には個性性の契機も特殊性の契機も普遍性の契機も混在しているというのが正しい。

プラトンの場合、魂は個体的であった。また、魂は、死と同時に身体から去るものでもあったから、身体を生き生きさせる源でもあった。ところが、カントの場合には、『純粋理性批判』に見られるように魂は認識の対象から除外された。そのお陰で、生命は一般的自然史の対象とされ、現代では生物学の対象である。

カントの言う「生命」は、生物学を受け入れているわれわれの目からすれば、きわめて特異な概念であるのは疑いない。そう思うのは、とりもおさず、従来、魂にかかわる問題として扱われた文化や情感、道徳が魂とともに奪われてしまっているということの意味するだろう。カントは、生命の中へ理性の欲求能力を押し込むことで魂について問題にできる圏内にとどまりえた。ところが、生命から理性が取り除かれているわれわれは、カントが問題にできた圏内からも除外されているのである。そのような状況下で生命や環境、ジェンダー・セクシュアリティが新たに（いや、近代への復古かもしれない！）生命という視点で問題とされるのは、おそらく生命にはもともと生物学に解消されることのない面が内在しているからであろう。文化や情感、道徳の排除された生命しか知らず、生命（生活）の質（QOL）を奪われた現代に、カントの「生命」は、文化や情感、道徳を含むような生命を取り戻す方向を示唆してくれている。また、カントの「生命」は、その中に従来、精神論として扱われていた領域が残されていることで、ミシェル・フーコーが言うような「生権力」の問題というきわめて現代的な問題にも通じうるのである。まさしく、カントの「生命」は、現代の生命論へといたる通過点である。

---

カントからの引用は、基本的にアカデミー版カント全集（*Kant's gesammelte Schriften*, herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften Bd. I – XXIX, Berlin 1902ff.）の巻数とページづけに依る。ただし『純粋理性批判』については慣例に従い、第一版をAの記号で表し、第二版をBとし、アラビア数字でページ数を示している。

1 Vgl. A. Philonenko, Kant und die Ordnungen des Reellen, in *Kant-Studien* 61, 1970, S.

- 319.
- 2 Ebd.
- 3 岩田靖夫、坂口ふみ、柏原啓一、野家啓一『西洋思想のあゆみ——ロゴスの諸相——』、p.169-170.
- 4 Philonenko, a. a. O., S. 308.
- 5 Philonenko, a. a. O., S. 318.
- 6 Philonenko, a. a. O., S. 319.
- 7 Philonenko, a. a. O., S. 316.
- 8 Philonenko, a. a. O., S. 317.
- 9 現代では臓器移植は実現されているし、クローンも羊等の動物では実現されているが、それは、技術的に可能となっているのであって拒絶反応そのものが動物の身体からなくなったということの意味しない。従って、医療技術の発達がこの議論の有効性を減ずるものではない。
- 10 V, S. 198.

心の全能力	認識能力	ア・プリオリな原理	適用されるもの
認識能力	悟 性	合法則性	自 然
快・不快の感情	判 断 力	合目的性	技 術
欲求能力	理 性	究極目的	自 由

- 11 Vgl. Otfried Höffe, Eine republikanische Vernunft zur Kritik des Solipsismus-Vorwurfs, in *Kant in der Diskussion der Moderne*, Hg. Gerhard Schönrich und Yasushi Kato, 1996, S. 403-405.

※ 本稿は、名古屋大学哲学会第21回大会（2005年4月、於・名古屋大学）にて「カントにおける個体と生命」というテーマで口頭発表した原稿を加筆訂正したものです。それ以降、このテーマの研究に時間がかかりすぎたのと考えが変わったため、本稿を学術雑誌へ寄稿するのを躊躇しておりました。本稿の掲載を心よく受け入れて下さった弘前大学哲学会事務局の諸先生方に篤く御礼申し上げます。

（名古屋大学事務補佐員）